

## 幼児における記憶力を高めるための反復検索の介入効果

堀田千絵<sup>1</sup>・花咲宣子<sup>2</sup>#・堀田伊久子<sup>3</sup>#・多鹿秀継<sup>4</sup>#

(<sup>1</sup>関西福祉科学大学・<sup>2</sup>堺暁福祉保育事業部・<sup>3</sup>女性相談センター・神戸親和女子大学)

### 目的

子どもの記憶力を高めることは、児が日常生活を円滑に進めるための補助となるばかりではなく、保育者がスムーズに子どもとかかわる際の鍵となるため重要な意味をもつ。特に後者においては、子どもに指示が入らず一度話したことをすぐに忘れてしまうといった点が、子どもと関わる際の困難な事項として挙げられており(堀田・花咲・堀田, 2011)、保育者が子どもの記憶に定着しやすい関わりを工夫する必要性を示唆させる(関連研究として、堀田・花咲ら, 2011)。近年、同時限内で記憶を繰り返すよりも、検索を介入させることにより保持率が良いことが確認されている(e.g., Roediger & Karpicke, 2006)。そこで本研究は、当該材料の反復検索を、学習時に組み込んだ場合とそうでない場合の直後と遅延成績を比較することとし、幼児の記憶力を高めるための反復検索の介入効果を検討したい。

### 方法

**対象幼児** 15名(平均年齢5.6歳、年齢範囲5歳1か月から6歳7か月)。**実験計画** 年齢×学習条件×保持時間の3要因計画であった(年齢のみ参加者間計画)。**材料** 学習材料:Vlach & Sandhofer(2012)を参考に、言語課題は食物連鎖に関わるもの、非言語課題に関しては、部屋の特定の場所に対象物を置く課題を用意した。各課題6題のうち3題は実験者が問題文と回答を幼児に聞かせる反復読み聞かせ条件(以下SSSS条件)であり、残り3題は実験者が問題文を読み上げ、回答を子どもに想起させる反復検索条件(以下STTT条件)として交互に挿入した。**テスト材料**:言語、非言語課題ともに学習項目、非学習項目の計8項目を用意した。**ソースモニタリング課題**:言語、非言語課題を通じ、直後、遅延テスト時に「あった」と回答した項目には、いつ、どこで、誰から教えてもらったかを尋ねた。**手続き** (1)言語課題学習後、5分間絵の模写を挿入させ、直後テストを実施した。(2)言語課題に引き続き、非言語課題学習後、同じく5分間挿入課題を設け、直後テストを実施した。(3)3時間後、言語、非言語課題ともに直後テスト段階と同種で配列を組み替えた課題を実施した。

### 結果と考察

言語、非言語課題別に3要因の分散分析を実施したところ、非言語課題については、成績、ソースモニタリング課題ともに有意な差は認められなかった。言語課題(図1)においては、反復検索を行った幼児の方が反復教示条件よりも成績が高くなり( $F(1, 13) = 5.17, MSe = 6.67, p < .05$ )。ソースモニタリング課題(図2)においては、年齢における違いが傾向差で認められ( $F(1, 13) = 3.42, MSe = 9.67, p < .09$ )、6歳児の方が正確であった。現状では、言語課題においてのみ反復検索による記憶促進効果が得られているが、今後対象幼児を増やし、更に検討を行う必要がある。

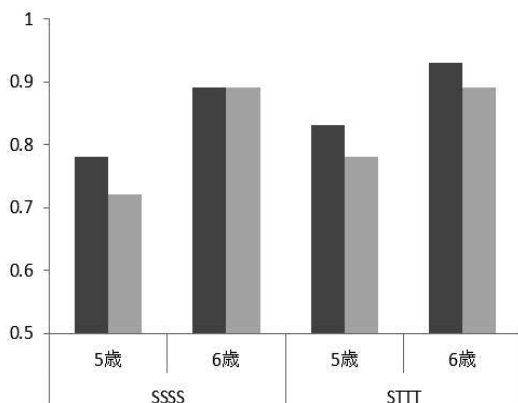


図1 各学習条件による年齢、保持間隔別の平均再生率

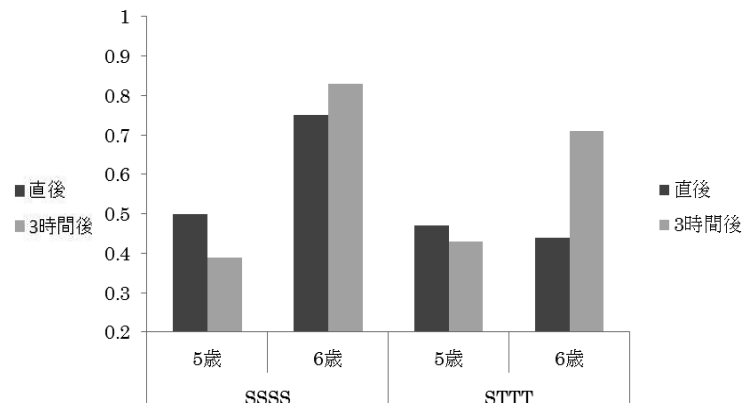


図2 各学習条件による年齢、保持間隔別の正ソースモニタリング率

### 引用文献

堀田・花咲・堀田(2011). 第58回日本小児保健協会学術集会講演集, 163. 堀田・花咲ら(2011). 第9回認知心理学会論文集, 108. Roediger, H. L., & Karpicke, J. D. (2006). *Psychological Science*, **17**, 249-255. Vlach, H. A., & Sandhofer, C. M. (2012). *Child Development*, **83**, 1137-1144.